

## 安齋伸さんを偲ぶ

昭和二十四年卒同期生 藤田富雄

はじめに

家族の一員として、カトリック信者として、多くの友人に囲まれた趣味人として、安齋伸さんのこやかな表情、やさしく思いやりの豊かな人柄はとても書きつくせない。そこで、宗教学の同期生としては、(A) 修業勉学の時代、(B) 研究調査の時代、(C) 社会活動の時代に分けて、伸さんの歩んだ道をふりかえってみることにした。これが伸さんを偲ぶ私の方法にほかならないが「死者に甘くなるのは人情の常と最初から思いこんでいる」私であることを御承知の上で、まだほめたりないと思われる方、もっときびしい批判がほしいと思われる方、つまらぬ駄文を読まされて腹の立つ方、こんな方は貴重な時間をすでに浪費してしまった方で、申訳ありません。まことに有難うございました。無駄に時間を過ごしたくない方は、これから先はお読みにならないようお願いいたします。

### (A) 修業勉学の時代

#### (一) 学徒出陣

安齋伸さんは学徒出陣時代については余り語りたがらなかった。それは、私共一般の軍隊体験とは比較に出来ないほどの、悔しい、耐えきれない、深刻な、辛い思いを再び想起したくなかったからだと思う。しかし、伸さんのおおらかで、わけへだてのない人柄は、この語りたがらなかった苦悩を克服したことから生まれたと思うので、伸さんを理解するためにはどうしても彼の「学徒動員五十年に思う」から抜粋して、初年兵時代の思いがけぬ出来事を書くことから始めたい。

私共仲間も、彼の悲惨な体験と英雄的反抗について最初に聞いた時には、大いに憤慨し感動したが、自分の体験した似たような苦労話を語り慰めあうのは避け、可笑しな失敗談に話題をかえて、笑いながら軍隊話を打切ってしまうことが多かつ

た。私共には得意になって自慢できる思い出はないし、苦々しい思い出ばかりが次々に蘇ってくるからである。

「筆者が実際に体験した軍隊生活は、政府の八紘一宇とか大東亜共栄圏確立のスローガンとは裏腹に、問答無用の権力的命令、支配、抑圧、暴力が若い兵士や候補生をさいなむ陰惨な牢獄のような生活で、古参兵の目に余る新兵いじめは日常茶飯事、これが帝国陸軍の軍隊なのかと深い疑惑と憤りを抱かせるものであった。

筆者は軍隊生活にも人格の尊重と自主自立の精神が必要と考え、軍隊生活の批判ではなく、時の二高校長野口明先生に、自分の入隊前に受けた教育を感謝し、これを軍隊生活に生かしてゆく決意を書き送った。

この便りが、二高の配属将校で、二二部隊の高級将校でもあるK大尉の手に渡り、軍国主義教育を二高にも徹底しようと願っていた彼を激怒させたことを、筆者は知るよしもなかった。

従って、K大尉が筆者の中隊を訪れてその呼び出しを受けた時、むしろ、K大尉を懐かしく思い、喜んで中隊長室を訪れたが、そこで見たものは憤怒の形相で立つ、二高時代にはまったく知ることのなかった大尉の姿であった。

彼は筆者に手紙を突きつけ、非国民、反逆者と罵り、すぐに二高教育が誤っていることを書くように命じ、書かなければ降等し、戦地に送り出すと脅したが、拒否したところ、殴る蹴るの暴挙に出て、眼鏡は飛び、身体は突き飛ばされて、隣室の中隊事務室の戸を破って事務室の床に倒れこみ、勤務していた下士官たちを驚かせた。

今、思うにつけても、もしK大尉の命令に従っていたら、二高の先輩、友人、後輩に合わせる顔を永久に失っていたことだろうと、頑張り通したことを嬉しく思っている。」

(一九九三年九月二日 中外日報 原文のまま)

そんなことがあったためか、伸さんは仙台予備士官学校には進めず、千葉県津田沼の東部軍教育隊に送られた。その後、山口県防府、三田尻の飛行第五十一戦隊に派遣され、さらに、丹波篠山の航空通信隊一〇部隊に転属となった。敗戦は篠山で迎えた。

その間、津田沼の教育隊の教官阿部市郎右中尉、第五十一戦隊の隊長中村凡夫中佐の温かさと思いやりに感謝し、わが国の軍隊にも血も涙もある軍人がいたことも忘れてはいない伸さんである。この文章は次のような決意表明で終わっている。

「少年時代から戦争の中に日々を過ごし、青年期に学徒兵として軍隊生活と戦争を身をもって体験した筆者としては、学徒動員五十年にあたって、あらためて、次の世代に戦争の悲惨さを語り伝え、余生を宗教的平和達成のために尽くしたいと願うものである。」

不思議なことに、私共同期生は一高から五高までのナンバー・スクール出身者が揃っていたけれども、他校の出身者にとっても旧制高校時代は、青春の夢に満ち、軍隊生活と比べてみると、自由と自治と友情の理想郷であったから、学徒出陣組はいつも自分の高校時代に誇りをもち、新しく戦友となった全国の学徒兵と、互いに慰めあい励ましあって、現実の厳しい軍隊生活に耐えてきた。

ところが、安齋さんは愛する二高の配属将校によって母校そのものを否定されただけでなく、軍隊の中にまで侵入してきて、伸さん自身が母校を否定するように強要されたのである。人並以上に母校二高を愛していた伸さんにとって、これほど残酷な試練はなかったと思う。酔えば必ず「青葉城下の…」と寮歌を歌い出す伸さんを知っている私共は、この深刻な苦悩を見事に乗り越えたところに、若き日の安齋伸さんの人間形成の原点があったように思う。

## (二) 宗教学科入学

「復員入学とその後の思い出」という伸さんのエッセイが『時と人と学と——東京大学宗教学研究室の七十五年——』（昭和五十五年一〇月二二

日発行）にある。これによると井門会長の告別式の弔辞や中外日報に書かれた「安齋伸さんの信仰と学間について」という副題のついた「人生の黄昏に生への賛美歌」という題目の名追悼文も、遠慮がちな表現をしているので必ずしも伸さんの宗教学科入学の事情を正確に伝えているとはいえない。少し長くなるが、彼の文章そのものを引用して、事実を述べておきたい。今回の機会を逸すると、安齋伸神話の誤った固定化が進行してしまうのを憂慮するからである。

「昭和二十年の秋、丹波篠山の航空通信隊から復員した私は、戦争中入学許可の通知を受けていた東京大学文学部のどの学科を志望するかを考慮し、仏文に入ることを願った。

故郷仙台で少年の頃から親しくご指導をいただいた土井晚翠先生が鈴木信太郎先生に紹介状を書いてくださったので、仏文研究室に鈴木教授をお尋ねして、入学を願ったところ、先生は、「仏文はいつも定員に満たない学科であるので、いつでも入れてあげる」ということであり、私は大いに喜び、帰郷して約半年心の整理や読書に過ごして、翌年春、再び研究室に鈴木教授を訪ねて、入学の手続きを申し入れた。

ところが先生は、戦後に復員した学生で仏文は定員をこえ、すでに余地はないと言われ、落胆をかくしきれない私に、「君、フランス文学は何も仏文に所属しなくても、勉学できるよ。」と言い、とりつくしまもなく、私はすごすごと研究室を出たのであった。

すると、仏文の前の研究室の入り口に一人の学生が立っており、浮かぬ顔の私に声をかけ、滔々と宗教学のすばらしいこと、また研究室がいかに暖かい研究共同体であるかを述べ、私を研究室の中に招き入れてしまったのである。

私は少年時代、カトリック教会で受洗しており、宗教には興味を抱いておったので、これが機縁となり、宗教学科に入学することになったのだが、このとき、私を研究室にひっぱり込んだ学生こそ、現在筑波大学教授の井門富二夫君だったのである。」

（前掲書 原文のまま）

以上の叙述は、井門さんの中外日報の名文では次のようになっている。

「当時の宗教学研究室の隣には、辰野隆先生を主任とする仏文学研究室があり、大勢の復員学生が詰めかけていた。安齋さんも当初は仏文研の盛名にあこがれて、隣の研究室に行くつもりであったらしい。が、幼少時からカトリック教会の信仰土壌の中で育ったこともあって、本人に言わせると「宗教学」の表示板にひかれて研究室の前に立ち止まったのが運命であったということになる。

これまた本人の表現であるが、かれの服の袖をつかみ研究室内に引っ張り込んだのが私たちであり、「まるで芸者置屋のやり手ばあのように、宗教学を絶世の美女と吹き込んだ」ために、本人はやりたくない宗教(科)学をすることになったということである。

本人のこの冗談めいた発言は、宗教学研究室の旧制学部時代の神話の一部として今も語り継がれている様子である。」(一九九八年 三月一〇日中外日報 原文のまま)

伸さんが仏文に入れなかった事情は彼の文章でよくわかり、失意の彼を宗教学科に強引に誘ったのが井門さんであることも明らかである。カトリックの安齋さんとプロテスタントの井門さん、浅野満さんとクリスチャン三人組が、神学論をやっていたかと思うと、いつのまにか話がまとまり、三人揃って万世橋辺りの名画座に消えて行くことも多かったようである。伸さんの宗教学へのいざない役を引き受けるのが、自分の役目と自負していたのが井門さんであったと思う。

### (三) 学生時代と卒業後

伸さんの「思い出」には、研究室で「岸本先生を囲んで、戦後の乏しい昼食を共にし、から茶を飲みながら、宗教の定義などについて論議をたたかわせるときなどは、実に楽しく、充実したひとときであり、空腹も忘れるほどであった(原文のまま)」と書いてある。私のような昼食ぬきの苦学生は、三年間一度もこの昼食会に出たことはない。どんなに粗末でも弁当を持って集まることができたのは、まことに恵まれた学生で、安齋さん

は疑いもなくその一人であった。

戦後の住居問題も悩みの種の一つであったが、伸さんはこれにも恵まれていた。岸本先生に紹介していただいた下宿には美しい娘さんの姉妹が住んでいた由である。品行方正なカトリック信者と見込んでの先生のお世話に違いないと、あまり素行に自信のない口さがない研究室のメンバーの羨望の言葉にも、平然と微笑している伸さんであった。しかし、結局そこが長い間の住居にならなかった事情は審かかではない。

安齋伸さんは、ただおとなしく学生生活を楽しんでいただけではなかった。学生大会では、カトリックの立場から、左翼学生に対して正面から論争を挑んだり、今ではめざらしくもないボランティア活動にも熱心に取組んでいた。

高輪教会における告別式で、粕谷神父が「三つの出会い」として、下宿探し、古タイヤ入手、御殿場の神山復生病院慰問について語り、安齋さんのかくされた驚くべき有能さと深い信仰に賛嘆しながら説教をされた。ラーナーの高弟であり、蟻の街の神父として著名な粕谷神父は、学生時代のカトリックの伸さんを最もよく知っている一人である。岩下壮一師が院長をしておられた神山復生病院の慰問に出かけたのは、粕谷甲一、今道友信、安齋伸と神学生で「われわれは何もしてあげられないから、歌でも歌いましょう」と伸さんが言い出したという。歌の得意な伸さんに比べると、やや下手で不得手な二人も致し方なく不承不承に歌ったそうである。ところが思いがけないことが起こった。ベットに臥している重傷の患者の切除した眼球のあとから、涙がどっと流れ出たというのである。

このお説教は感動的であった。そして、伸さんのやさしいエンタテナーの素質は、学生時代に既に開花していて、晩年「エンタテナーの権化」と私がニックネームをつけたもの外的外れではなかったと密かに胸を撫でおろした。

安齋さんが学生時代にどんな勉強をしていたかはよく分らない。石橋・岸本・大島の三先生の講義とゼミ以外の講義では、彼とはほとんど顔を合わせたことはないし、ゼミでも活発に発言する方でもなかった。私とは学問への関心が異なってい

たためか、選択する課目もほとんど共通のものはなく、たまに会っても特に話しこむこともなかった。従って、卒論「修道会の宗教教育展開史の分析」とか卒業前後から上智大学で神学研究を始めたとかいうことも、彼の死後に井門さんの名文で初めて知ったほどである。

昭和十九年十月入学のわれわれの中で、軍隊に短期間しかいかなかった柳川さんは二十三年九月に卒業したが、ほかの連中は二十四年三月に揃ってめでたく卒業した。その予餞会のときに、共同研究の発表と称して芝居をした。その詳細については、『時と人と学と』に私が書いた「前代未聞の共同研究発表」というエッセイをご覧いただきたい。その芝居で、安斎伸さんは高木きよ子さんをモデルにした「明日田屋きよ」という配役で、御殿女中風の矢飛白の着物をきた女形になった。晩年の伸さんとは雲泥の差で、食糧事情が悪かったせいからスリムで、黒い長髪もふさふさしていたから、学徒出陣の生き残りとはとても思えないなまめかしい美女であった。岸本先生がわざわざ呼び寄せて酌を所望されたほどであるから、その艶めかしさをご想像いただけたらと思う。まさに適役であって、後年のグロテスクな中年太りの安斎流と称する踊り姿しか知らぬ方には、初々しい色気たっぷりの若女形の美しさを感じてはいただけまい。

宗教学科卒業後、柳川啓一、大塚喬清、高木宏夫、井門富二夫は正則学院、浅野満は横浜共立学園へ、藤田富雄は立教学院へ、宮本忠正は金光教本部へと散って行ったが、安斎伸はカトリック神学校へと聖職の夢を選んで姿を消した。彼が神父修業の道を断念して、上智大学稲富栄次郎教授の教育学科の助手として現われた時、われわれ同期生は勿論、研究室一同も大歓迎で、岸本先生はお得意の綽名をつけて「ころびキリシタン」と命名をされた。安斎さんは「私はころびではない」と不服そうであったが、私共は「君が宗教学の仲間にコチコチのカトリック神学校から帰ってきたことの喜びの表現だから、文句をいうな」とたしなめた。このニックネームは、伸さんのカトリック信者らしい生活態度でいつの間にか自然に消えた。今では数人しかこんな綽名を知っている人は生き残ってはいない。

一九五八年、伸さんはあの第二の故郷となったヴィーンに旅立った。親友のヴィーン大学名誉教授、エーリヒ・ボツエントが、まだ三十歳になるかならずの若さで、国際カトリック宗教社会調査研究所所長に任命され、上智大学のペトロ・ハイドリッヒ神父を通して、当時助手であった伸さんをヴィーンの研究社と大学に招いたからである。

池袋の笹周で送別会を開いたとき、当時も貴重な熊掌を出して、豚足といかに味が異なるかを比較してもらい、入手の困難であった越の寒梅を十分に準備したのは、幹事の私である。英仏両語は堪能だが、独語は不得意な彼がオーストリアに留学することを心配した仲間が、せめて船中で勉強するようにと『藤田五郎の独逸語文典』を献呈したのは、誰の発案であったかはさだかではない。帰国後「あの本は一度も開かなかったよ」と言われてショックを受けたのは本を選定した私だけではなかったと思う。独逸語圏に出かける上智大学の助手に、独逸語入門書を送った当時のわれわれの外国語と外国事情の知識はこんなにお粗末であった。

外国語に弱いことは、一九五八年夏に開催された「国際宗教学宗教史学会（I(3)HR）」でも見事に露呈された。宗教学の研究室で外国語の得意な井門、安斎、田丸のような強力メンバーが留学中で、若手の赤司、宮崎が留学経験者、赤司以外で事務の中心であった戸田、脇本、後に加わった柳川、藤田は、岸本委員長から「英語の初段にも昇れない梯子段」と冷かされていた。岸本先生は語学力にも囲碁のように段位をつけるのがお好きで、御自分は五段と称しておられたから、他は推して知るべしである。

しかし、国際学会のおかげで、弱い外国語にも臆することなく、外国人の学者と意志疎通ができるようになった。国際事情に詳しく、外国語に強い今の若い研究室の諸兄からは、想像もできないようなことに違いない。

## (B) 研究調査の時代

### (一) ヴィーン留学と博士論文

国際カトリック宗教社会調査研究所で、博士号取得のため三年間、ヴィーンの森に近いボツエン

タ所長のアパートの隣のアパートを提供され、所長の車で研究所と大学に通うことになった。まことに幸運な安齋さんであった。

伸さんはフランスのパリ大学のル・ブラ教授が、宗教研究は神学と哲学の領域にとどまるべきでなく、社会現象・文化現象として実証的に研究調査すべきであるとした学風に共鳴し「オーストリア・カトリック教区の伝統地盤の歴史・社会的研究」という大冊の博士論文を完成した。これが「カルディナル・イニツァー賞」を授けられた大版三〇〇ページに及ぶ大冊であって、伸さんを一躍ヨーロッパの宗教界で有名にした論文であった。他方では、伸さんはウィーンの日本人会会長となり、オーストリアを訪問したり、居住したりする音楽家や学者たちの力強い味方となった。彼の世話になった人々は数えきれない。四年間に彼が交わり面倒をみた人々については、「遙かなるウィーン」や「黄昏の維納から」というエッセイを読んでも、その多彩な人物像に圧倒されない者はいないと思う。

彼のアパートには勿論夫人と娘さんが一緒に住んでいたため、日本食にあこがれる留学生たちが毎週のように訪れて、味噌汁とおにぎりや手作りの餃子を最高のご馳走のように喜んだ。まさに安齋一家総動員のサービスであって、ウィーン日本人会会長は、伸さんにぴったりの役割であっただけではなく、まさに安齋家は出会いと交わりにふさわしい集いの場（留学生のオアシス）であった。伸さんのウィーン留学は博士論文作製のためであるから、資料蒐集のため、ドイツ、ベルギー、オランダなどの研究所廻りも欠かさず、このようにして研究と交流の輪を広げたことは、後の社会活動の基盤となる豊かな人脈形成につながった。ウィーン留学がその契機となったといっても過言ではない。

## (二) 南島調査

ウィーン留学中の立教大の住谷一彦さんと共に伸さんは十八才のウィーン大学の学生クライナーさんに影響を与えて学者に育てた。そして一九六三年には、三人が共同で奄美大島周辺の島々を調査し、キリスト教の定着形態を、他の宗教や宗派

の活動との比較において分析することを試み、成果はすぐには出版された。一九六七年頃から沖縄返還という大きな政治的変動が生じたが、伸さんは窪徳忠先生を中心とする沖縄調査にも参加して国外で多くの発表をしたので、国内では『南島におけるキリスト教の受容』（一九八四年、第一書房）のような業績の一部しか知られていない。

しかし、南島調査は「宗教と社会変動」にかかわる調査に展開し、その結果は一九七三年の「宗教と社会変動国際学会」や(3)ISR（国際宗教社会学会）の各年次大会での発表となっていた。ウィーン時代とは全く異なる文化を持つ地域の宗教社会学的調査がこの南島調査であって、一九六三年から晩年に至るまで、十数回におよぶ調査旅行となって続けられた。

この調査の成果をまとめて、沖縄の深層文化として民俗宗教を明らかにすることができれば、カトリック研究からは独立した安齋さんの新しい分野の開拓となったと思われる。三十年に近い年月をかけた調査であるだけに、その研究がまとめられずに未完のままに残されているのは惜しい。伸さんの沖縄調査が、踊りの習得に終わったという失礼な批評を、まことに残念至極であると嘆くのは私だけではあるまい。

## (三) 上智大学教授

ウィーン留学以前には、伸さんは教育学科の助手で、稲富栄次郎教授に師事していた。先生の温容と豊かな教養について、伸さんから聞かされることが多かった。帰国後にも、かならず豊島区の先生宅に新年のご挨拶に伺っていた。その帰途、お子さん連れで板橋区の拙宅を訪れてくれるのが常であった。

ウィーンから帰国した安齋さんは、上智大学社会学科の創設に参加し、その教授として活躍したが、岡本英雄社会学科長は、告別式の弔辞で、「故人が創設後も面倒見の良い教師として、多くの学生に慕われ、その結果故人を中心として人のネットワークが築かれた。これは社会学科の大きな財産である」と讃えられたが、特に私共同期生の大塚さんと井門さんの長男が二人とも安齋ゼミのゼミナリストであることは偶然ではないと思う。

息子たちを彼の指導に任せ、その期待に立派に答えた伸さんは、すべての学生の親からも信頼されていたに違いない。彼の晩年の健康について心配していたのは、教え子たちだけではなかったのである。

面倒見の良い名教授としてめでたく定年を迎えた伸さんの頭の輝きが、大学の教育だけでも大変なのに、次に述べるように、社会での活動で東西を駆け廻ったのであるから、さぞ疲労困憊して艶を失ったと察せられるのに、ますます光沢を増した事実は、体力以上に精神力が逞しかったことを示している。

安齋さんが上智大学に奉職したのは昭和二十九年（一九五四年）で、停年退職が平成五年（一九九三年）であるから、四十年勤務したことになる。彼の「最終講義を終えて」という中外日報二月十七日の記事によると、

「紅顔の少年、たちまちにして白髪の老人となるのが世の現実である。筆者の場合、たしかに紅顔の少年の頃はあったが、白髪の老人とはならずして、禿頭の老人となり果てた。若い学生たちは筆者が昔から禿頭の老人であったかのように思いこんでいるようなのが、おかしくもあり、くやしきもあるというのが本音である。」という語り出しで、「(1)教授の最終講義などという掲示は気はずかしくて出さなかったが、二百人をこす学生が集まってくれ、使用してきたP・バーガーの社会学が我々の生活史に即して展開されているところから、筆者の講義も筆者の生活史、研究史をバーガーに即して気負いなく展開することができた。そして、政治権力と官僚制、階層的序列社会、社会統制の下に営まれる歴史的な社会の中で、若い人々が希望と忍耐、友情と協力を深めて、人間の解放と自由のために努力を重ねてゆくことを要請するとともに、生老病死の社会的な生活が深く永遠の世界と関わりを持ち、我々が死者の永生を思い、生者の時間と死者の永遠との調和の中に生き過ぎてゆくことへの理解と認識とを提言した。時間と永遠の中の共存の社会学こそは、筆者の社会科学と哲学、神学に培われた社会学なのであった。」ここに彼の生き方が見事にまとめられている。そして最後に、「今後は、好きな読書と執筆を中心に、散歩も心

がけ、諸先輩、同僚の言葉にも耳を傾け、国民皆信仰にむけて精神努力したいものである。」と結んでいる。

### (C) 社会活動の時代

#### (一) 第二ヴァチカン公会議委員など

「上智大と日本の伸さん」から「世界の安齋さん」へと飛躍する時代が到来した。それは世界の諸文化の多様化に伴い多価値の共存という厳しい現実に対して、カトリックが先頭に立って第二ヴァチカン公会議を始めたことに起因する。

安齋さんは公会議の「信徒職制委員会」や「異教徒との交流をはかる委員会」などの委員に、日本代表として駆り出されて東奔西走する破目になった。信徒職制委員会というのは、聖職者中心の運営を伝統とするカトリック教会において、信徒の伝道活動などの役割について審議する委員会である。一九六五年に公会議は終わったが、その後も多くの委員会が続いた。一九七二年秋に伸さんの勧めにしたがって、委員たちのローマ宿舎に伸さんと同室を許された私は枢機卿たちと毎朝食事を共にすることになった。ある朝アメリカの枢機卿が「アメリカが沖縄を返還するというのに、何故日本は素直にそれを受取らないのか」と真剣な顔で尋ねた。朝から面倒な議論になると困ると思っていると、伸さんにはにこにこしながら、左の掌を上に向けて、いかにも下さいというような風をしながら、ノーというように右手を顔の前で左右に振りながら、次のように答えた。「日本人は非常にシャイで謙遜だから、たまらなく欲しくても頂戴したいとは言えない。口ではお断りしますといながら、本心ではどうぞ下さいと手を出しているのです。」この当意即妙な答えと身振りを見て、どのように問題が展開するかを見守っていた人々は、どっと笑いながら拍手した。これで見事に一件落着である。ここに伸さんの素晴らしい外交手腕を見出した思いがした。ついでにもう一つ彼が夜遅くなって興奮しながら話したことをつけ加えよう。

「今日、余り実のない議論ばかりしているので、爆弾発言をしてしまった。私は、エコノミックアニマルと悪評の高い日本からきた委員ですから、エコノミックアニマル的な発言をします。日本で

は新製品を出すときには、十分にマーケティングをして、新製品が完成したときにはすぐに売れるように準備を十分整えています。だから新製品の製造と販売は同時に行われます。ところが、ヴァティカンはどうですか。何年も議論を重ねていますが、その中で実施されたものがどの位ございませぬか。空理空論はいいかげんに止めて、直ちに実行可能な政策を議論しようではありませんか。」このように発言したと話し、いささか得意気に、自分の意見に賛成してうなずいた人が多かったと語った。

「異教徒との交流をはかる委員会」では、アジア・アフリカ部会委員長となり、貧しい国からの代表も多いので、夕食をご馳走することもあったらしい。こんな時はワインのご機嫌も加わって、十二時頃に帰ってきて、各国の事情や委員たちの苦労話を熱をこめて語り、三時頃まで聞き役に廻らされた。彼は一日中、英独仏など外国語で議論をしてきたので、ホテルで私とあって日本語でしゃべれるのが何よりのストレスの解消になるといい、彼に同情しながらも私は新しい情報に耳を傾ける喜びを味っていた。予想以上に同室の効果は大きかったのである。

ヴァティカン公会議が終わって、世界各地から集められた職員をどのように処置するかという深刻な問題が、特にアジア・アフリカの発展途上国出身者は帰国しても適当な職がないという難問もあるので、委員長として頭を痛め、対策に腐心し、提言もしたようである。

このように、安齋さんはヴァティカン公会議に、驚くべき情熱をもって臨んでいた。私は、彼のおかげで、ほんの一部を覗いただけでも公会議の雰囲気を感じることができ、心から感謝している。

会議には無関係な私は、朝食後委員たちが揃って出かけた後は、自由にローマ見物に出かけたのは、言うまでもない。その間、ローマ郊外で開かれたラッサール神父の三泊四日の接心に出席して、約五十名の神父、修道士、修道女、ユンク派の学者たちと一緒に修行した体験談は別に発表した。接心がすんだ後で共に参加した三名の日本人(ヴァティカン大使服部比左治さん、裏千家ローマ出張所長野尻命子さん、私)が、精進上げと称して大

使館ですきやきパーティを開いて頂いた。公会議も打上げになった伸さんが参加したのは勿論である。こんなときの伸さんは、いつものようにくつろいで、自由に話題を提供し、皆を楽しませる座談の名手であり、エンターナーの権化であった。

一九七九年九月、第一回の東西霊性交流は、ヨセフ・スパー神父の意志を継ぐ南山大学のバン・ブラフト神父や花園大学禅文化研究所の協力と、大森曹玄老師と弟子の門脇佳吉神父の話し合いで交流計画が進み、ヨーロッパのベネディクト系、トラピスト系修道院の好意で実現した。日本から五十人の禅僧を中心とする各宗の人々が欧州の各修道院で三週間交流した。裏で具体的な実務に当たったのが、伸さんや野尻さん、お茶を稽古している神父さんたちであったと聞いている。第二回は一九八三年、欧州から十七人の修道士と修道女が来日し臨済と曹洞の各地の禅堂で修行した。第六回目が今年一九九八年の秋に行われた。この交流の表面には出ないで、裏の仕事にただ黙々と骨身を惜しまずに献身したのが安齋伸さんの真骨頂であった。東西霊性交流が二十年間も続いていることを彼と共に喜びたい。

## (二) WCRP 専門委員など

WCRPは、世界宗教者平和会議の略称であって、安齋さんは飯坂良明学習院大学教授らと専門委員として、世界各地の大会を駆けめぐることが多かった。またWCRP日本委員会の平和研究所所員として宗教的課題の解決に努力し、他方では「現代における宗教の役割研究会」(略称コルモス)の常務理事を努めて、日本中の学者と親交を深めた。

彼の死の直前十二月二十六・二十七日、京都国際ホテルでコルモスの第四十四回研究会議が開催された。一九七〇年代の世俗化論、八十年代のポストモダン論に代わり、九十年代に台頭してきたグローバリゼーションをテーマに、阿部美哉さんが基調公演をした。当初講師に予定されていた飯坂良明さんが入院中のため、コメンテーターの予定だった阿部さんが講演者となり、安齋伸さんがコメンテーターの代役を務めた。これが安齋さんの最後のコルモス会議出席となったが、責任感の

旺盛な伸さんは、十二月二十九日付けで、コルモス研究会の内容を報告しながら、「地球化の世紀と宗教」という論文を中外日報社へ、三〇日夕方にFAXで送った。これが伸さんの遺稿論文となった。

三〇日に動脈瘤が破裂して出血、意識不明となって救急車で病院に運ばれ、集中治療によって意識を回復、その後は平静を取り戻し、死の十分ほど前まで普段と変わらず家族と話しを交したという。医者には痛みの緩和だけを求め、自ら延命処置を断り、安らかに、従容として永遠の眠りについたそうである。まことに安齋伸さんらしい大往生であった。

### (三) 中外日報論説委員

『二十一世紀への遺言——現代の宗教と社会の展望と提言——』は一九九六年十二月二十日に出版された安齋さんのまさに遺著である。この本のはしがきに、「筆者は十数年来、中外日報紙に論説を書かせていただいているが、創刊一〇〇周年を祝う一環として、本間昭之助社長の好意と形山俊彦記者の努力によって、筆者の多くの論説の中から、主として現代社会と文化、政治、経済、教育界、そして宗教界への提言を選択し、まとめて一冊の書として刊行して頂けることは、筆者にとって大きな喜びであり、感謝に堪えない。」と書いているが、二十年近くにわたり論説を執筆していた伸さんの愛読者は多く、その与えた影響は大きい。

彼の遺稿論文となり絶筆となったコルモス研究会のレポートとコメント「地球化の世紀と宗教」は、彼の中外日報に対する最上の、そして最高の愛情と感謝のあらわれであったと思われる。倒れた日の夕方にF(1)Xを送った伸さんの責任感と、それを果たした安心感を想像して涙なきをえない。余りにもドラマティックな最後の原稿の成立事情である。

伸さんの論説の内容と表現を、いつもまた「安齋節」が始まったと皮肉っていた私は、今では「文は人なり」と喝破した故人の名言を思い出しながら、彼の「ひとがら」と「文体」がああ「安齋節」であったことを、しみじみと味わっている。あれはやはり安齋伸でなければできない語り口であり、

まさに「安齋節」としか言いようがない論説であった。

### (四) その他

安齋さんの社会活動の範囲は広く、その交友の範囲も驚くほど広く深い。ヴァチカンの信徒評議員時代には現教皇ヨハネ・パウロ二世となったポイチーラ枢機卿と親交があった。宗教の役割研究会、世界宗教者平和会議については、既に述べた。日本宗教学会で長年にわたって評議員、理事、常務理事として学会をリードしてきたことは言うまでもない。その他にも、宗教放送委員会、庭野平和財団、中央学術研究所でも、重要な役割を果たしてきたし、国際宗教社会学会での活躍も忘れられない。

井門さんが、告別式の弔辞のなかで、故人が、学者としての識見を生かして諸宗教との対話に尽くしたことを、「貴方は今日、あらゆる宗教から花を捧げられている。みな、貴方のカトリックの信仰を知っている。その信仰、宗教学に対する識見の深さから滲みでる優しさは、諸宗教の心を溶かした」と高く評価した。そして井門さんが伸さんを宗教学に誘ったことを「むしろ神がそのような人生を設定してくださったのだと思う」と話し、最後に「ありがとう安齋さん」と結んだと、中外日報は報じている。私共同期生の代表、井門富二夫宗教学会会長の弔辞を、「いい弔辞だった」と激賞した私も、井門さんの結びの言葉を下手なドイツ語で繰り返したい。

「ダンケ・シェーン、ヘル・プロフェソール・クレメンス・シン・アンザイ。」

おわりに

村上助手から「安齋さんの追悼文」を書くように電話をいただいて、即座にお断りし、井門さんか、大塚さんを書いていただくように推薦した。二人とも同期生であると同時に、二人の長男が揃って安齋ゼミの出身者であるからである。ところが、二人の返事はノーで、私に納得できる理由は示されていない。ある人の忠告では、いつも高い原稿料をもらって書いている人に無料で書いてくれと頼む私が非常識であるとのこと。成程と納得。そ



ここで早速村上さんに「潔く」この原稿を引き受けると返事をした。いつもの調子で、あまりずけずけと歯に衣をきせないで筆を走らせると恨みを買うことになるから、なるべく筆を抑えて、当たり障りのないように書けとの注意も受けた。伸さんと同年でも、こんな注意をされるほどまだ未成熟な自分を反省して御親切な忠告に従ったつもりだが、「文は人なり」の格言通り、私の短所は随所に現われていると思う。寛如を乞う次第である。

伸さんと私のつきあいは、酒や遊びを抜きにしては語れない。そちらの方は、伸さんの愛弟子の田島忠篤さん編集の『追悼文集』の方に駄文を書いておいたので、この「偲ぶ」では一切省略することにした。

また伸さんが、苦学して高等小学校、夜間中学、仙台二中、旧制二高と廻り道をしながら、新聞少年として土井晩翠先生、生物学の朴沢三二先生、加藤陸雄さんなどと出会いの幸せを得、小学校では平野信二訓導、中学校では伊藤浩次郎先生や進藤健三先生、高校では阿刀田令造先生、萩庭三寿先生の指導を受けたことなど、学徒出陣以前のことは、事実の確認不能と諦めて省略せざるをえなかった。ヴィーン留学中や上智大学での指導薫陶を受けた諸先生や神父さんの御尊名もすべて省略させていただいた。「当時の関係の方々（先輩、同僚、後輩、友人、弟子）のお名前を省くとは失礼です」という伸さんの叱責を覚悟して、皆様のお許しをお願いしたい。

宗教学同期生の多くは、いわゆる十二月一日入隊組で、特別処置で入隊中に出願して昭和十九年入学、二十一年復学し、二十四年に卒業したことになっている。先輩で復学の遅れた方や、他学科に移った腰かけの学生もいたので二十一年の宗教学科の同級生は多かったが、次第に少なくなった。鋭いセンスで社会変動期に注目した同期生七名中の四名が宗教社会学を専攻した。専門領域は異なっているが、その領域にレッテルをつけると必ず文句が出て食いつかれるから、岸本先生流にニックネームでその傾向を想像していただくこととする。その四名は、アカボンこと高木宏夫、スッポンヒバリこと井門富二夫、どじょう鍋こと柳川啓一、それにイキナカストリッコこと安斎伸である。多

芸多才の伸さんの愛称は「ころびキリシタン」「安斎流の家元」などの公認のほか、「ひかり・つる・たま・すべり・はげ」などの名詞が動詞に用いられた「ひかる・すべる・はげる」などを含めて、禿頭を連想させる言葉はすべて「禿名」「禁句」であるとのたまい、本人はわざと不愉快気その言葉を口にしたり人をじろりと睨むのが常であった。これを逆手にとって、料理から酒の名前まで全部はげにこじつけて呼び、流石の伸さんもお手上げで禿頭をかかえたので、一同大笑いをしたことがある。これでもか、これでもかと禁句を連発した女中さんの博学とセンスのよさに、すっかりシャッポを脱いだ私共は、祇園富の井で同期会を開いた時のことを忘れない。「あれには参った」と伸さんも繰返し述懐していた。

四人の宗教社会学者は、それぞれの分野で日本の宗教社会学の先駆者として立派な業績をあげ、各大学の名誉教授となっている。しかし、四人とも個性が強く、負けず嫌いで、自己主張を押通し妥協しないから、周知のように、必ずしもいつも仲がよかったとは言えない。ただ伸さんだけは、仕方がないと諦めていたようで、ぶつぶつ言いながらも、わけへだてなくつきあうように努力していた。それでも四人が顔を合わせると、さり気なく話しているようでも何となく気まずい空気が生まれていた。専門が同じであると、競争心や対抗心が自然に頭をもたげてきて、意地張りになるのかと想像し、当たりさわりのないようにしておくのが仲間の暗黙のエチケットであった。そして「専門が異なっていて、ゴーイング・マイ・ウェイなのが気が楽で良いね」と大塚、浅野、藤田の三人は話しながら、学者として四人程の業績をあげられなかったのは、「のんびりしすぎて、緊張感が足りなかったせいだ」と顔を見合わせている。この三人が東南アジア青年の船で五十日間を過ごしたのも同期の不思議な縁である。「伸さんを偲ぶ」は、やはり私が引受けるべきでなかったと現在後悔することしきりであるが、「潔く」引受けた手前、こんなに長々とつまらないことを書いた責任まで逃れるつもりはない。間違いの指摘や反論はどんどんお寄せいただきたい。「潔く」頭を垂れて拝聴する腹はきめている。言訳がましいが、脳梗塞で

三週間入院中に乏しい資料で書き上げたので、この位の「偲ぶ」エッセイで勘弁していただきたい。

(一九九八年十一月七日退院の日脱稿)

#### 追記

- (1) ヴィーン大学の Ph. D の学位論文は、“DIE RELIGIÖSE PRAXIS DER KATHOLIKEN IM ZUSAMMENHANG MIT EINIGEN SOZIALFAKTOREN IN MITTEL-UND WESTEUROPA”
- (2) 安齋伸先生追悼文集『私にできますことなら』1998年11月28日発行。文集末に詳細な年譜があるので、私の記憶ちがいなどはこの年譜で訂正していただきたいと存じます。
- (3) 11月28日東京会館9Fローズルームで「安齋伸を偲ぶ会」が開かれたとき、追悼文集が渡されたが、偲ぶ会の出席者は、こんな盛んな会は今後誰ももてないだろうと安齋さんの生前の活躍と人柄を改めて想起し、こんなに多方面の方が寄稿した文集も二度とできないだろうと話し合った。伸さんは「まことにえらかった」「ほんまにえらい方でした」。